地域遺産のデジタル活用化の教育プログラムについて
—授業設計の効果検証と今後の展望—

長谷川 隼人
大正大学 教学マネジメント推進機構 学修支援センター　専任講師

（要旨）静岡県下田市は、住民の提案で未来に残したい資産を「下田まち遺産」として認定する独自の制度を実施している。本プログラムでは、下田市と大学の連携によって、学生が「下田まち遺産」を題材にデジタル映像作品を制作することで、学生の実践的学びと地域資源の再発見を目的とした。住民との交流を通じた作品制作は、地域愛着の醸成と関係人口の増加に貢献できる一方で、短期間の実施や地域との関わりの深度に課題が残った。

キーワード：下田まち遺産、地域活性化、関係人口、デジタル映像制作、産学連携

1. はじめに

静岡県下田市は、豊かな自然に恵まれており、多くの文化的・歴史的資産がある。下田市では、これらから未来に残したい遺産を住民から募る「下田まち遺産」という制度を景観行政に組み込み、今日までに 154 件を認定・登録している。これは全国的にもユニークな取り組みであるが、「下田まち遺産」を保全するだけでなく、もっと住民の自発的なアイデアによって活用する余地も残されている[1]。

下田市は、多くの地方自治体と同様に少子高齢化に直面するなかで、観光を基幹産業として交流人口の増大に力を入れてきた。近年では、コロナ禍を契機として、首都圏に近いワーケーションのスポットとして、関係人口の創出にも目を向けた施策を打ち出している。他方、下田市は、本学の地域構想研究所と連携協定を結んでいる。このように、下田と本学の間には、双方の先人が関係づくりを模索した経緯があった。そして、下田市出身の筆者は、下田に地縁、血縁がある。

そこで、筆者は、下田でまちの景観保全に関わってきた方へのヒアリングを契機として、2024 年 3 月と 8 月に下田市市役所を訪問して、どのようなかたちで新たな協働ができるのか話し合い、教育プログラムの考案と実践の準備を進めた。

このプログラムは、2024 年 3QT の表現学部表現文化学科 2 年生を対象とするプロジェクト型学習（担当：田島悠史准教授）の一環として実践した。それは、「下田まち遺産」をコンテンツとするデジタル映像作品を学生たちがグループで制作するものである。実際、下田での実習は、2024 年 10 月 2 日から 4 日にかけておこなった。

下田での実習の間、地域の魅力を発信している方々と学生の交流会、学生たちが撮影した素材を編集した映像作品の試作にフィードバックを得るために、市と共催し下田市役所の課長級職員や地域のキーパースンを招いた中間発表会を実施した。学生たちは、実習以後に発表会で得たアドバイスなどを踏まえて、2024 年度の 3QT の学修成果として、4 チーム（学生 16 名）が作品を完成させた。

そこで、本稿では、この教育プログラムの狙い、期待される効果、実践のプロセスと効果の検証、課題と今後の展望について紹介する。

[1] 長谷川、田島（2024）

2. 教育プログラムの設計

（1）狙いと効果

自治体や大学が双方の限られた人的、物的資源を活用して連携、協働するうえでは、教育プログラムがそれぞれにどのようなメリットがあるのか明確にしておく必要があろう。

大学にとって、学生が実社会における実践的な学びを得られることは学生一人ひとりの学びを広げ、深化できる、という点で大きな意義がある。一方、自治体としては、一般的には大学の専門家による知見、大学生の人的資源などを政策立案や遂行に活かせる可能性をあげることができる。たとえば、観光が基幹産業である下田市にとってみれば、学生たちの取り組みを観光政策に活かし、それが交流人口の増加に寄与するということがメリットの一つとしてあげられる。

だが、今回の教育プログラムは、自治体のまちづくりに直接的に寄与できることを目指しているわけではない。今回のプログラムは、下田市が力を入れようとしている関係人口づくりに主眼を置いている。

関係人口とは、継続的に地域に関わる「よそ者」として定義される。この定義からもわかるように、これまでも存在してきた事象に注目し、概念化したものといえる。近年、注目を集めてきた背景には、自治体内部で地域活性化の人材をいかに生み出し育てるか、という課題感がある。こうした中、継続的に地域に関わる「よそ者」の存在が地域内の住民に与えるポジティブな影響が地域づくりのグッド・プラクティスの分析のなかで明らかにされてきた[2]。

筆者が属する大正大学の地域構想研究所は、下田市と連携協定によって関係を保つ、潜在的な関係人口である。今回のプログラムは、「よそ者」による「下田まち遺産」をコンテンツとする作品づくりが、下田の人々に対して刺激を与えることを期待している。つまり、学生たちの活動や作品を通して、地域資源の隠れた魅力を再認識し「下田まち遺産」を利活用するための住民のアイデアづくりが促進されることを狙っているのである。

また、学生たちにとってプロジェクト型の学習は、実践を通して知識・技能の獲得のみならず、協働する力の涵養を期待できる。今回の教育プログラムの対象となる学生は、放送・映像コースに属し、将来的にメディア業界への就職を検討しているものが多い。本学の 2 年次は、1 年次の初年次教育を経て、3 年次以降の専門演習（ゼミ）の専攻に向けて、本格的な専門教育へと移行する時期に位置する。このような時期に、自ら企画をたて、撮影、編集の実践経験を得られることは、自身の課題を見いだし、今後の学びの目標を設定する機会となる。また、仲間とともに限られた時間と資材のなかで作品づくりをプランし、マネジメントすることは、社会人として求められる協働する力の涵養にもつながる。

さらに、今回の教育プログラムには、これからの下田の関係人口を増やしていく狙いもある。プレ社会人としてキャリア形成の準備期に位置する大学生にとって、大学時代の印象的な経験は、将来的に下田に関わる可能性を開く。

たとえば、本プログラムの担当教員である田島は、学生時代に下田でアート作品の展示をおこなっていた。田島は、その後アートマネジメントの専門家としてのキャリア形成を進め、再び下田にて表現学部のプロジェクト型学習の実現に協力することになった。

このように、今回の教育プログラムは、学生の実践的な学びに加え、キャリア形成に影響を与え、卒業後も地域と関わるきっかけとなる。将来的な関係人口の増加にも貢献する効果が期待できる、といえよう。

（2）仕掛けと工夫

このプログラムでは、学生による「下田まち遺産」をコンテンツとする作品づくりが、結果として下田に暮らす人々に対して刺激を与えることを期待している。そこで、あらかじめ下田の課題解決を学修の目的とせず、フィールドワークを通して自らが感じたものを重要視して作品制作をおこ

[2] 田中（2021）

なうことをゴールとした。したがって、学生たちに１つ以上のまち遺産をコンテンツとして活用すること以外の条件は課さないようにした。

以上のゴール設定のもと、プロジェクトは、4つのフェーズから構成した。まず、フェーズⅠ（9月後半）は、事前準備として学生たちが作品構想を話し合い、撮影スポットの候補の選定をおこなう期間である。次に、フェーズⅡ（10月２日から4日）は、下田における実習を設定し、短期間に集中して撮影および仮編集とふり返りをおこなう期間である。そして、フェーズⅢ（10月中旬から後半）は、事後授業として、仮編集をした作品に対するフィードバックと完成に向けた作品構想の軌道修正やブラッシュアップをする期間である。そして、フェーズⅣ（11月初旬）は、完成した作品へのフィードバックや学生個人のふり返りを実施する期間である。

このように、プログラム全体を通して、フィードバックとふり返りのサイクルを繰り返すことによって、経験からの気づきや教訓の言語化を促し、一人ひとりの学生が自律的な学習サイクルを回せるように設計をした。

今回の教育プログラムの狙いを実現するために、各フェーズで様々な仕掛けと工夫を試行した。たとえば、自律的な学修サイクルを回すことができるように、フェーズⅠにおいて学生たちの作品制作に関する構想、すなわち学修目標を設定してもらい、フェーズⅡの実習直後とフェーズⅢの作品完成直後に、自身の作品に対する満足度と課題について言語化をしてもらった。

また、学生たちに下田を知ってもらうために、フェーズⅠでは、まち遺産を所管する下田市役所

図-１　下田市役所職員による事前授業の風景

建設課都市住宅係と連携して、下田市の情報、まち遺産制度の説明を実施した（図-１）。

フェーズⅡでは、学生たちの作品づくりを媒介に学生たちと下田で暮らす人々が相互に刺激し合うことを期待して、交流や仮編集作品に対する講評会の機会を設けた。

そして、フェーズⅡからフェーズⅣにかけては、下田有線テレビ放送（以下、SHKと略記）より学生たちの作品づくり対するテクニカルなアドバイスの協力をいただいた。専門職の方から助言やフィードバックをもらえる経験によって、放送映像業界に関心を持つ学生たちのモチベーションを高めることを期待したためである。

今回、SHKは、学生たちのPBLを番組化するために、学生たちの下田における実習を密着取材するとともに、学生たちにインタビューをおこない、「下田まち遺産の使い方 ～大正大学表現学部下田プロジェクト～」（49分）を制作した。番組は、2025年１月11日に下田市民に向けて放映された。その際、番組内にこちらで用意した評価用のQRコードを埋め込んだ。このようにして、より多くの下田市民が放送を通して、学生たちの作品に意見を伝えられるように工夫した（図-２）。

図-２　SHK制作番組に埋め込んだQRコード

なお、学生たちの取り組みを下田の人々にオンタイムで広報するために、SHKのニュース報道に加えて、下田市役所に協力してもらい伊豆地域を発行対象とする『伊豆新聞』に実習中に取材してもらった（図-３）。

「下田まち遺産」映像化

大正大2年15人 きょう市関係者へ発表

大正大学メディア表現学科の2年生15人が同市白浜出身である長谷川隼人さん(42)が縁で実現した「関係人口」の創出」をテーマとする現場学習。2日に下田入りし、4グループに分かれて「下田まちづくり遺産」をメインに映像コンテンツの制作を行っている。

「PBL」(プロブレム・ベースド・ラーニング=問題解決型授業)で、専任講師の田島悠宏さん(42)が学生時代に商工観光所の保存運動に携わり、同僚ドア、仙寿、土藤商店、入田浜、下田公園などの言から来たと考え物や風景の動画撮影・編集に励んだ。「ペリー提督の目線で見る下田」を撮りたいという女子グループの直原花雅美さん19は「下田の魅力を伝える作品に仕上げたい」と言ってカメラを回した。

各グループは10分程度に映像を編集し、4日早後、市関係者らに発表する。

ペリーロードの景観を映像に収める学生グループ=下田市三丁目

ワイン海底熟成仲間を募集

11日まで河津建設

下田市中の河津建設(河津正社長)は11日まで、会社の作業船を有効活用して実施する「下田海底熟成ワイン」の仲間を募集している。

海底熟成は冷暗で一定の海水温がワインをまろやかにするとされる。同社は地域貢献事業として毎年仲間を募って実施し、今年で9年目。11月上旬に下田港内に沈め、来年4月下旬から5月にかけて引き揚げる。

対象は市民か市内の事業所。費用は無料で20本入りビールケース単位で受け付ける。希望者は各自でキャップ

図-３　2024 年 10 月 4 日付『伊豆新聞』朝刊 6 面

（3）狙いや効果の検証方法

このような工夫を通して、今回の教育プログラムが学生のみならず下田で暮らす人々への刺激や影響を与えることを意図して、相互に変化・成長する機会の創出を狙った。

教育効果の検証は、各フェーズにおいて筆者が作成をした設問への回答およびリフレクションのテキストを分析することで進めた。

まず、フェーズⅠの初回授業終了後、学生たちの下田のまちへのイメージを確認した。次にフェーズⅡの下田実習終了直後に、「下田にどのくらいの愛着が湧いたのか」理由を含めて確認した。これら設問を通して、将来的に下田に対する関係人口を増やしていく狙いに照らして、今回の PBL が学生たちにどのような受け止め方をされたのか確認することを目指した。

次に、フェーズⅢの作品完成直後に、自身の作品に対する短い紹介文と見どころを書いてもらうことで学修成果物の総括を促すとともに、今回の教育プログラムを通して身についたと思われる「力」とその理由について言語化してもらった。このように、学修成果物（作品）に対する総括的な自己評価のみならず、プロジェクトの開始から終了時点までの自身の変化にも目を向けることで成長実感の可視化を図った。

3. プロセスと効果の検証

（1）学生たちのまちへの愛着の創出

先述したように、フェーズⅠからフェーズⅡにかけて、学生たちの作品づくりを媒介に学生たちと下田で暮らす人々が相互に刺激し合う仕掛けをおこなった。これは、学生たちのまちへの愛着を高める、という点において効果的であったと考える。

下田実習初日の夕方には、いわゆるワールド・カフェ方式でおよそ 90 分間の交流会を実施した。まず、交流場所として、元金融機関の建物を関係人口の交流拠点としてリノベーションした複合コミュニティセンターを利用した。この施設には、コワーキングスペース、ゲストハウス、シェアオフィスなどがある。また、下田市役所建設課職員：2 名、SHK のレポーター兼編集者、カメラマン：2 名、民宿経営者兼デザイナー（U ターン）：1 名、フリーランスの翻訳家（I ターン）：1 名、複合コミュニティセンターマネージャー（地域おこし協力隊）：1 名の計 7 名に出席をしてもらった。地域活性化のキーパースンとして活躍している人々の交流が双方にとって刺激となることを期待した（図-４）。

図-４　コミュニティセンターでの交流の様子

また、実習最終日には、下田市の協力を得て下田市文化会館において、仮編集作品（主としてコンセプト部分）に対する講評会の機会を設けた（2 時間）。そこには、初日の交流会に参加した人たちに加えて、下田市の観光交流課、産業振興課などの課長、下田市観光協会事務局長にも出席をしてもらい、その場で学生たちへのフィードバックや

意見交換をおこなった。

そのうえで、下田実習の終了直後に、「下田にどのくらいの愛着が湧いたのか」（5 件法）とその理由を含めて確認した。その結果は、図-５で示すように約 8 割の学生が「よく湧いた」以上の実感を抱いたことがわかった。このように、学生たちの多数が実習経験を通して、下田のまちと自身をポジティブな関係に位置づけることができたといえる。

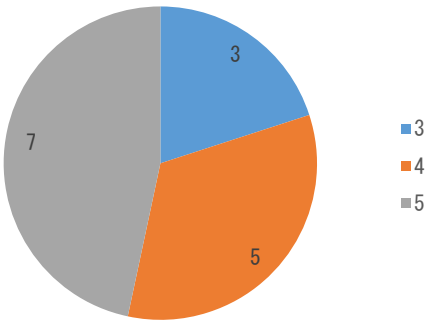

図-５　実習によって下田にどのくらいの愛着が湧いたか（N=16、ｎ＝15）

「とてもよく湧いた」を選択した回答の理由としては、次の記述が心理的な距離感の変化を端的に示している。

「はじめは旅行じゃん！と思っていたのですが、お店の方に下田の魅力をインタビューをしたりと取り組んでいるうちに旅行とは全く違うなと思うことが多く、下田をただただ楽しむというより、楽しみつつ地域の方々と協力して映像制作に取り組んでいるような気持ちになったので、下田という地域にも下田の方々にもとても愛着がわいた 3 日間となりました」

他にも「とてもよく湧いた」理由として、以下のような記述がみられた。

「実際に足を運んでみて、魅力というものはそれだけではないと気づきました。映像には残せない魅力です。それは下田の方々の『下田への思い』でした。『下田の魅力について教えてください』と質問を問いかけた際に、どの方も満面な笑みで、魅力を教えてくださいました（中略）また下田の方々は快く案内してくれたり、撮影のアドバイスを教えて頂いたり、温かく私たちを迎えてくれました。特に印象に残ったのは飲食店〇〇のおばあさんが、下田の昔話を聞かせてくれたことです。おばあさんの温かい笑顔と下田への深い愛情を感じ、私も下田の一員になったような気がしました」（〇〇は個人名ゆえに伏せ字とした）

「今回、初めて下田に訪れました。私が感じた下田の魅力は人の温かさです。グルメを素材にするにあたり、お店の撮影許可を撮ったのですが、当日に撮影許可をお願いしたのにも関わらず、快く受け入れてくださいました。加えて、おすすめの場所や撮影方法の案などアドバイスくださった店主さんもいて、初めましての学生にそこまで深く関わってくれるのかと感動しました。3 日中、1.5 日は雨でしたが、晴れていると本当に景色が綺麗で、自転車で訪れたベイサイドプロムナードと犬走島での撮影がとても楽しかったのが印象的です。山も海も近くにあり自然をたくさん感じることができました。お店の店員さんが、『また来てください』というお言葉をくださったり、今度はプライベートで週末旅行に来てみたいなと感じました」

「旅行に行ったりしても今回ほど街を散策する時にいい場所を見つけながら歩くことはなかったため、街のことをよく知ることができた。それに取材をさせていただいたお店の全ての方々が、自分達に温かく接してくれた。取材の関係で喫茶店に行っても人数分ではなく 1 人分しか料理を頼んでいなくても、デザートのオレンジを 4 人分くれたり。サンドイッチで使ったパンの耳を食べていいよと出してもらい、ジャムまで出していただいた。最後に写真をお願いした時も快く引き受けていただいた。このような経験から下田のことが好きになった」

これら多くの学生が選択したスコア 5 の理由には、作品づくりを通して、まちのことを自分事化ができている様子が見られるだけでなく、まちの

人たちと作品を協働する感覚を共有できたことが強調されている。このように、今回のプログラムは、まちへの愛着をもたらし、継続的に地域に関わる「よそ者」としての関係人口的な立ち位置への変化を生み出す機会になり得ることを示唆している。

一方、スコア３の「多少は沸いた」を選択した理由としては、「下田の人と深く関わることがあったため、愛着は沸いた。しかし、やはりまだ『そうゆう場所がある』という感覚に近い」という記述が象徴的である。他にも「ここに来たらリフレッシュできると感じた」が「海鮮が食べれないことや、虫が多くいたことなど自分にとってマイナスな面をいくつか感じた」、「撮らなきゃという意識が強くありゆっくりのんびり見ることができなかった」という理由があげられていた。

スコア３を示した理由からは、下田のまちに関しても観光客としての関わりー交流人口的な立ち位置という域にとどまるものであった様子がうかがえる。

この点に関して、タイトな実習スケジュールが影響した点が考えられる。たとえば、実習後のアンケートでは、「夜遅くまで作業しても平気な人にはおすすめだが、普段10時くらいとかに早めに寝ている人には気合いと根性で乗り切るしかなく大変だと感じた」、「コンセプト決めから撮影、編集までを２泊３日で仕上げるのは厳しい（中略）特に夜中に編集作業するのは身体的精神的にも厳しいため、夜に弱い人は大変。しかし、追い込まれて作品を仕上げるのもいい経験であるのと、自分がこの仕事に向いているのかを判断できる」という記述があった。

これは、じっくりと時間をかけて作品づくりに臨みたい学生もいることも想定して、プロジェクトにゆとりをもたせる配慮が必要であることを示唆している。

（2）学生たちの成長実感

作品提出後にとったアンケート（7 件法）からは、今回の教育プログラムを通して、学生たちは平均的に大きな学びや成長の実感を抱いていたことがわかった。とりわけ、筆者が分類した学修スキルや資質に照らすと、マーケティング意識、編集スキル、撮影スキル、企画・構成力という点がプロジェクト開始前と比較して伸びたという実感を抱く者が多い（図−６）。

図−６　学生たちの成長実感のアンケート結果（N=16）

多くの学生がマーケティング意識や企画・構成力を選択した理由として、本プログラムのゴール設定の影響があると考えられる。つまり、フィールドワークを通して自らが感じたものを重要視して作品制作をおこなったため、学生たちが何を目的にそれぞれに作品づくりをするのかという点に向き合わざるを得なかったのである。それが、上述した成長実感につながったと考えられる。

実際に学生たちが成長した「力」を選択した理由には、次のような記述がみられた。「映像を作るうえでの視聴者へどのように伝えるかという考え方」、「企画を考え、人に見せるという考えを張り巡らせることで学びへと繋がった」、「自分たちが作った映像作品を誰にみてもらいたいかという、ターゲットを明確に意識した」、「誰に届けたいかなど詳細を良く考えて作るようになった」など。

この点に関して、実習最終日の講評会において実際に下田の関係者の方々に作品の一部を視聴して生でコメントを貰う機会があったことは、ターゲットを意識することのリアリティを与えることになったと思われる（図−７）。

図-７　講評会の様子

また、多くの学生が編集や撮影スキルを選択した理由は、今回の作品づくりに不可欠な作業として実践をしただけでなく、SHK 職員による作品づくりに対する的確なアドバイスやフィードバックが大きな意味を持ったと言える。例えば、学生たちは、以下のように記述をしている。

「自分たちが学んでいることを仕事にされている方から直接アドバイスをしていただける環境で学べたことを感謝している。SHK さんからしたら初歩的な事でも質問したら全て詳しく丁寧に説明してくださったため自分の成長に繋がった」

「私はインタビューをする際少し早口になってしまっていたが、アナウンサーはゆっくりとわかりやすい口調で質問していて、される側としては聞きやすく、考える時間もあってすごくやりやすいと感じた。また、カメラマンの方が『こう撮るといいよ』『そっちだと逆光になっちゃう』『風は止めた方がいい』など必要に応じて指導して下さり、とても勉強になった」

「撮影準備やインタビューなどの一連の流れがスムーズで驚いた。2 人で回していたのに私たちの邪魔にならないようご配慮もしてくださって、今後取材や撮影をしていく身としてとても勉強になった。撮る側になりたいと思ってこの道を選んだのに、いざ撮られる側になってみると緊張して自分でも何を言っているのか分からなくなってしまったのが正直な感想である。普段は感じることのない、カメラを向けられる側の経験ができて新鮮だった」

「交流会にて、SHK の方々とお話しさせていただいた際、私たちは何を伝えたいのか等が不明瞭だということや、素材の撮り方がわからないということをご相談させていただきました。撮り方、編集方法はカメラマン、編集者の好みもあるし正解はないけど、ただ風景を撮るのではなく『これを撮りたい』を明確にして撮ることを意識すると、画角の入れ方など自然とわかるようになるというアドバイスをいただきました。その後はご教示いただいたことを意識して撮影に取り組みました。聞く前と聞いた後では撮影に対するプラスαができていい気づきになりました」

このように、今回のプログラムにおける SHK との連携は、放送映像についての専門的な学びを深めようとする学生たちにとって有効に機能し、次項で述べるように、学生たちのモチベーションを高めるポジティブな影響を与えたといえる。

（3）学生のモチベーションの向上

作品完成直後に、自身の作品について思い通りの表現ができたのか（5 件法）、その理由について言語化をしてもらった（図-８）。

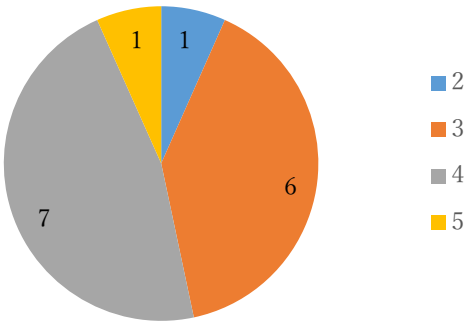

図-８　思い通りの表現ができたか
（N=16、ｎ＝14）

選択した理由についての記述を見ると、多くの学生は、作品として完成できたことに達成感を感じていることが共通していた。だが、最終的な仕上がりに非常に満足している学生は 1 人のみであり、他は何らかの納得のいかなさを感じていた。学生たちの記述を見ると、まず、作品のコンセプトそのものの独創性や独自性を出せなかったとい

う点での不満足さが共通する傾向として見られた。

たとえば、「広告業者に依頼して制作してもらう映像とどのような点で差をつけることができたかと考えたときに、あまりできていないのではないかと思った（中略）誰もが作ることのできる作品になっているのもあまり満足はしていない」、「コンセプトをやんわりとした感じで始まってしまったため、交流会や先生方からのフィードバックを受けて方向性をコロコロ変えてしまった点があったため、あまり自分たちらしさが出せなかった」、「最初考えていたレトロをテーマとする内容とは別のものになってしまったので思い描いたものではない」といった記述がみられた。

次に共通する傾向として、作品のコンセプトを表現するための準備や技法が足りなかったという反省である。たとえば、「頭の中で想像してるものを作ろうとしても、それを作るのに必要な動画が足りていなかったり、イラストでの表現も技術が足りずいまいち求めていたものにはなっていなかったり、実際に作ってみると『あれこんな感じになるのか』というのが多々あった」、「動画素材など撮り忘れている部分が少しあり、思い通りのインサートを差し込むことができなかったとおもう」といった記述がみられた。

このように今回のプロジェクト学習を通して、学生たちは、限られた時間のなかで仲間とともに一つの作品を完成させることができた、という点での達成感は強いものの、それで十分な満足をしたものは少なかった。学生たちの多くは、自身の理想と現実のギャップを認識した。そして、ギャップを埋めるべく、自らの課題を見いだした。それは、次への挑戦や目標設定を促すことになり、モチベーションを向上させる意義があったといえる。例えば、「もう一度、『下田まち遺産』をコンテンツとする作品づくりをおこなうとしたら、どのような作品を制作してみたいですか？」という問いに対する学生たちの回答は、以下に紹介するように、意欲的かつ具体的に踏み込んだ記述が多くみられた（似た内容の記述は省略）。

「今度はまち遺産に関わる人のドキュメンタリーのようなものを制作してみたいと感じた」

「下田まち遺産の建物の全体をドローンで一周してから、建物内に入っていくという動画を繋ぎ合わせることで、ドローンの可能性を広がる作品を制作してみたい」

「『下田まち遺産』の周知 CM を制作してみたいです。30 秒程度で、『下田まち遺産』の制度について何があるのかなどを伝えるものです」

「〇〇さんのグループのような雰囲気の動画を作ってみたいです。スピーディーでな縦向き動画を作ることで Vlog のようになり Tiktok やインスタにもあげやすい形になると思うので、それで若者へ向けて下田のまち遺産の魅力を発信する動画を作りたいです」

「下田まち遺産を海外の人向けに紹介する動画を制作したい。なまこ壁や形の変わった郵便ポストは海外ウケがありそうだと考えたから。また、まち遺産ではないが黒船祭の様子を作品にしてみたい。黒船祭は下田の日常とは全く違う雰囲気でやっているのを知り、人が賑わっている下田を撮影したい」

「人をメインに出演させてセリフを足すことで、ドラマのようなストーリー性のある作品を制作したい」

「映像ではなく写真として制作してみたい。確かに今回の映像制作でも写真はいくつか撮ったがどうしても動画中心の撮影方法だったため写真へのこだわりはそこまで出せなかった。そのため、写真という目からでしか感じ取れない媒体で制作したい」

「夜の下田が一番印象に残っているため、夜の下田を使ったイベントを企画して撮影してみたいと思いました。また、今回下田に住んである方に向けた作品を製作したため、ドキュメンタリーにして地元の方にインタビューした作品や、自然が多かったため景観をいろいろな角度から撮影した PR 動画を作成してみたいです」

以上のように、学生たちは作品完成に達成感を得たものの、思い描いていたものを独自に表現するという面で課題を感じ、満足度は限定的だった。だが、自身の理想の表現と現実のギャップを認識できたことは、ドキュメンタリーやPR動画など多様な表現方法への具体的な挑戦意欲を高めることにつながった。

(4) 下田側の受け止め方

学生たちの作品に対するフィードバックは、SHK職員をはじめ関係者の人たちから制作途中においても実施していたが、完成作品に対してもコメントをいただいた。以下に実際の学生グループの作品の一部と学生が作成した紹介文、それに対する下田の関係者の方のコメントを掲載する。

タイトル：「週末旅行で下田まで」

静岡県下田市のことを知っていますか？日本最初の開港場として歴史遺産が多く残る「開国のまち」です。そんな下田市ではまち遺産として登録された歴史や自然、文化を楽しむこともできますが、グルメも負けていないんです！まち遺産×グルメの魅力をたっぷり詰め込みました。週末に満足な旅行はいかがですか？（図-９）

動画リンク：https://youtu.be/PH5ZOgSCuyo

図-９　動画URL

コメント１

「スピード感があって見やすいと感じます。動画時間が短くテンポがいいので、ついつい何度も再生してしまう。グルメにウェイトを置いた動画であれば、1 品あたりのカット数を増やして、もう少し長く映像に料理が映し出されるようにしても、良いかもしれません。『何を食べたか』程度には理解出来ますが、『美味しそう』などの感想は持てませんでした。料理を撮影する時だけ照明を使用して、露骨に他のカットよりも綺麗に仕上げるなどでも、不思議と料理がよりおいしそうに見えたりします」

コメント２

「旅先でのグルメ情報は誰もが調べるものでこの動画を見て下田のグルメ食べに行きたいと思う内容でした。お店の方が優しかった、なまこ壁の建物に入れる等の情報があり行ってみたくなりました。BGM のテンポに合わせてカットしていくのも好きです。私も伺った事があるのですが、〇〇さんと〇〇さんの魅力や情報がもう少し出せた気もします」（〇〇は個人店舗名のため伏せ字）

コメント３

「下田へ明日行こうかという会話が、視聴者に下田は近いんだという事を印象づけることが出来て良い。女子大学生目線での映像でターゲットが絞られていたことが良いと思う。最初の映像がクリアではないのは意図があってのことかどうか」

タイトル：「ジェイクとエヴァンスの下田訪問」

ドローンによるさまざまな視点からの街並みの撮影、個性豊かなキャラクター達による下田の町の紹介、下田に行った感想を自分たちの感情を取り込むことによって、新鮮な映像作品になっています。また、ドローンの身に起きた悲劇から、キャラクター達がどのように行動して、ラストを迎えるのかも見所です（図-10）

動画リンク　https://youtu.be/9LtH8aOy4Ko

図-10　動画URL

コメント１

「アニメーションと静止画で進んでいく構成が凄く好きです。二人のうち一体がロボというのも最高です。私の好みになってしまいますが、アニメーションに動きがあるので背景は思い切って全て静止画でも面白いかも。ジェイクの質問に対して完璧に答えるエヴァンス、その内容に関する静止画をバックに張る（引きや寄り、別アングル等混ぜて何枚も）のような感じ。住職喋りカットも住職が喋ってた内容をエヴァンスが語る方が個人的には好きです」

コメント２

「雑多なジャンルを組み合わせた、戯曲ショートムービーの印象を受けました。一貫性が無く、“ここは無くてもよくない！？”というパートも多いように感じますが、それも含めて作品の“良さ”を感じました。全体的には楽しく笑える動画に仕立てたいのかな？と思い、了仙寺インタビューパートがシリアスなドキュメント風な印象を持ってしまったので、ハートー1 です。せっかくキャラクターが登場しているので、〇〇〇のように、キャラクターに質問させてみたり、相槌や反応をさせたりして、統一感を持たせてみてはいかがでしょうか？」（伏せ字の部分は番組名）

コメント３

「ナビゲーターがいてなかなか面白い。もう少しテンポがあっても良かったと思う。了仙寺の住職のインタビューは良かった。最後金目鯛を食べたのかな」

なお、SHK の自主番組「下田まち遺産の使い方～大正大学表現学部下田プロジェクト～」のなかに視聴者のコメントをもらえる QR コードを埋め込んだものの、これを通した意見は見られなかった。今回のプロジェクトの関係者ではない下田の人々の声を拾うためには、別途、仕掛けが必要であることが見えてきた。

4. 課題と今後の展望

今回の教育プログラムでは、静岡県下田市の「下田まち遺産」を題材に、大学生が地域資源を活用したデジタル映像作品を制作することで、学生の実践的な学びと地域活性化の双方に貢献することを目的とした。少子高齢化という課題に直面する下田は、観光を基幹産業として、交流人口や関係人口の増加に向けた取り組みを進めている。

今回のプロジェクトでは、学生が地域住民と交流しながら映像制作を進めることで、地域の魅力を再発見し、地域住民自身が資源の活用方法を考えるきっかけを提供できることを目指した。

実践を通して得られた教育的観点の課題としては、まず、時間的制約と負担の問題があげられる。2 泊 3 日の短期間で企画から撮影、編集までを行うタイトなスケジュールが、一部の学生にとって大きな負担となった。特に、夜遅くまでの編集作業は体力的・精神的な疲労を招き、作品のクオリティにも影響を与えたと考えられる。

次に、地域との関わりの深度の問題である。多くの学生が地域住民との交流を通じて下田への愛着を深めた一方で、十分な交流ができなかったと感じる学生もいた。その結果、一部の学生は下田への関心が観光客レベルにとどまり、関係人口としての意識を持つには至らなかった。

そして、学生の作品の独自性と満足度の問題である。学生の多くは作品の完成に達成感を得たものの、独自性や創造性に欠けることに不満を感じていた。特に、コンセプトの明確化や表現技法の不足により、理想と現実のギャップが生じた。

これら課題を踏まえた今後の展望としては、まず、プログラム期間の見直しと柔軟性の確保を検討したい。学生がより深く地域に関わり、質の高い作品を制作できるようにするためには、段階的なスケジュールの導入が必要である。特に、事前のリサーチやオンライン交流を活用することで、現地での作業効率を高める工夫も求められる。

次に、地域住民との継続的な交流の促進である。今回は、授業の制約上、単発のフィールドワークにとどまるものとなった。作品づくりに携わった学生が継続的に訪問できるような工夫、あるいは

オンラインでのフォローアップを通じて、学生と地域住民の関係を深める必要がある。これにより、下田市の関係人口としての意識づくりをより促進することができると考える。たとえば、一度受講した学生がSAやTAのような形で、再度、プロジェクトへの参加を促すことも一案である。

そして、専門的なサポート体制の強化である。今回は、地元メディア（SHK）や地域のキーパースンの方々に多くの協力を得ることができた。また、作品制作における技術的な指導やフィードバックの機会を得ることが学生のスキル向上の意識を涵養するうえで効果的であることが分かった。今後も、こうした地域と産学の連携を強化していくことが求められる。

最後に、発信力の強化と評価システムの確立である。学生の作品を地域内外で広く発信するために、たとえばメディア露出やSNSの活用をさらに推進する必要がある。また、今回、視聴者からのフィードバックを取り入れる仕組みを整え、学生の活動や作品が地域の人々にどのような影響を与えているのかを可視化することを試みたが、想定していたような機能を発揮しなかった。この仕組みを有効にするためのアイデア、あるいは別の仕掛けも検討することも必要と考える。この点、今回は事前準備が足りずに実現しなかったものの、本学との連携協定を結ぶ下田高校との授業連携もひとつの方策としてあげられる。このように、今後は、学生たちによるまち遺産をコンテンツとする映像作品の活用法の考案も含め、学生たちの作品が地域の側にどのような影響を与えるのか、検証を続けることが課題である。

以上みてきたように、今回の教育プログラムは、総じて学生にとって実践的な学びの場であると同時に、地域の魅力を再発見する貴重な機会となったと考える。今後は、学生と地域の双方向的な関わりを一層深めるために、プログラムの改善と継続的な関係構築が重要となる。これらの取り組みを通じて、下田市の地域活性化と関係人口の増加に貢献できる可能性が広がっている。

6. 謝辞

今回のプログラムの実践に際し、下田市役所建設課都市住宅係や下田有線テレビ放送（SHK）の方々をはじめ下田市の関係各位に大変ご協力をいただきましたことをあらためてお礼を申し上げます。また、下田市へのアプローチにあたり本学学修支援センターの北條規教授にアドバイスを頂いたこと、下田市職員の本学の来校にあたり地域構想研究所の山本恭久副所長補佐にご対応を頂きましたことにお礼を申し上げます。

参考文献

1）長谷川隼人、田島悠史「関係人口が生み出す伊豆下田の景観施策―大学・地域連携型授業の実践に向けて」『地域構想』(6) 2024年3月

2）田中輝美『関係人口の社会学―人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会、2021年